大津繪ぶし〝葛の葉〟

歌「はづかしや、淺ましや、年月つゝみし、かいもなし、おのれと、ほんしよあらはして、親子夫婦の其の中を、別れにやならぬしぎとなり、ほんにおもへばあじきなや、てゝごに此ことつたへたべ」

言「我は元より、人間ならず、六年以前信田にて、悪右衛門に狩りだされ、しするゐのちを保名どのに、助けられ、ふたゝび花咲亂菊の千年近き狐ぞや」

障子にかたみの、戀しくば、尋ね來て見よ和泉なる、信田の森の、うらみ葛の葉

歌「保名は見るより、信田をさして、童子が母はおはさぬかと、うろ〳〵たづねゆく」



〝吉野狐〟

五代目

笑福亭松鶴

エ、頃は一月の末つ方、年の頃廿二三と思しき男、邊りきよろ〳〵打眺め、袂の中へ拾ひ込む石、瓦屋橋の西詰から人の見て居るのも知らずに、橋の欄干に手をかけて今や飛び込まんとする有様『コレ待つたあぶないがな』『イエどうぞお放しなされて下さりませ、どうでも死なねばならぬ者で御座ります故、助けると思うて殺して下さりませ』『コレ何をいふのや、醫者が藥違ひしたのやないで、助けると思ふて殺す人が有るか、死は一旦にして易し、生は難しと云ふ事が有る、死ぬとは思案が若い譯をいはんせ、譯を聞た上で、死なねばならぬ事なら、手傳うてでも殺してあげる、マア〳〵待たんせコレ（引倒して投げる）コ、若いだけ心力が強いな、一體お前はどこの人や』『（チエヘと泣く）』『お